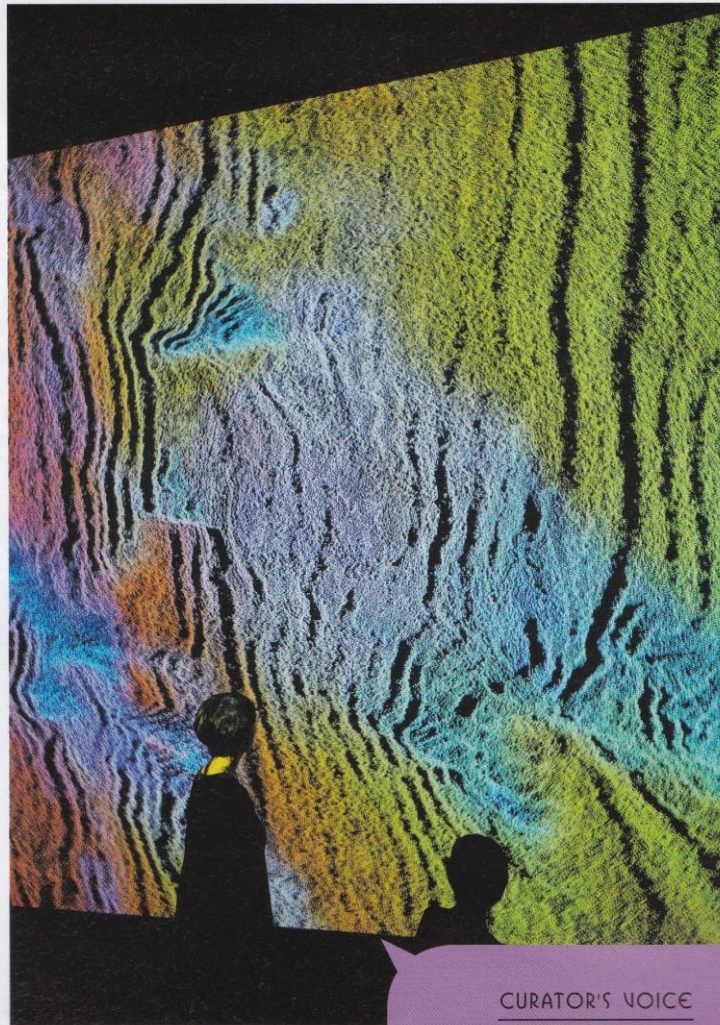


2016年に行った、カブリ数物連携宇宙研究機構での滞在制作から生まれた〈datum〉シリーズ。今展ではその最新作を発表する。

平川紀道 (datum) 2019年 Courtesy: Yutaka Kikutake Gallery, Tokyo



CURATOR'S VOICE

夕日を写した画像が、平川が開発した演算によって、コンピュータ上で姿を変え、うねるように回転してゆきます。その様子は、なぜだかまた別の自然現象を思い起こさせます。人間の意図的な決定の連続を超えた、新しい美の在り方について、考えさせる作品です (熊倉)



4 NORIMICHI HIRAKAWA
平川紀道さん

1982年生まれ。コンピュータ・プログラミングによる演算そのものやその結果を用いたインスタレーションを国内外で発表する。

高次元空間で捉え直す、自然の美

Q この作品は夕日の映像を独自のアルゴリズムで変換したものだそうですね。

はい、素材は夕日を撮影したムービーデータです。その最小単位であるピクセルは、位置を示すXY、色を示すRGB、時間を示すTの6つの要素で表せます。するとムービーデータ全てのピクセルが6次元空間に立体的に浮かび上がる。その高次元立体を向きや速さを調整し、回転させています。

Q なぜ、夕日の映像なのでしょう？

以前、知人とこんな話をしたことがあるんです。「現代アートでは、夕日のような誰かが美しいと思うものを作ってもしょうがない。印象派の画家は美しい自然を美しく描いたけれど、今はそうじゃない」と。で

も僕はこの話にわだかまりがあって、なぜ夕日は美しいのか？を真剣に考えなくていいのか、と。それで、写真や映像など身近なデジタルデータを介して、夕日の美にどうかアプローチしようと考えたんです。

Q 処理したデータを高次元空間で再び見せる。その行為に託している思いは？

この宇宙では見られない美。人知を超えた美を見てみたい欲求があります。僕らが生きる3次元の美は、6次元でも美しいのか、とか。数学は次元を超えて通用します。だからプログラミングを用いているのですが、ロジカルな作品から人もはエモーショナルなものを受け取ってしまう。人間のそうした感性にも興味があります。